



「アインシュタインの宿題」

福江 純 著, 大和書房, 1,600 円

解説書

お薦め度

☆☆☆☆☆

本書は、アインシュタインの残した言葉をタイトルモチーフとして引用しながら、どうして不思議な現象が起こるのかはあまり説明していない解説本と数式の嵐の教科書の間のギャップを埋めようと試みた、相対論の解説書である（まえがきより）。

私自身は、科学関係の一般向け解説書を最もよく読んでいたのは、高校生のころ受験勉強の合間だったように思う。そして、そのようにして読んだうちのいくつかは、ご多分にもれず相対論関係であった。また、大学の学部するときには内山氏著『相対性理論』（岩波全書）の序の最後のひとことに発奮して、しばらく集中して読み上げたこともあった。おそらく似たような経験をお持ちの方は、けっこうおられるかと思う。

さて、そのようなわけで相対論関係の本はこれまでもいくつか読んでいたのだが、本書の説明には聞き覚えのないものもあり、なかなか新鮮に感じた。同じ著者の『ほくだってアインシュタイン』（岩波書店）と似た展開の部分もあるので、著者の創意による部分は、おそらく私の印象よりも多いと思われる。そして、読み進めていくうちに学部の時には式を追うことが中心になってしまい、意味を十分に考えていなかった部分をいくつか気付かされた。実は、読み終えた今、相対論の教科書を改めてじっくり読んでみたい気分さえなっている。このように「まえがき」で述べられている啓蒙書と教科書のギャップを埋めるという著者の試みは、少なくとも私の場合には成功しているようだ。

また、私の勤務する西はりま天文台では、一般の方に宇宙を案内する中で、さまざまな質問に接している。その中で特によくある質問3つのうちの2つまでが「宇宙の果て」と「ブラックホール」で相対論と関係している。しかし、こういった質問はな

かなかその場で短い時間のうちに説明するのはむずかしい。どうしても、そのときの質問に応じて現象を説明するだけに終わっており、相対論そのものに関してはご自分で本を読んでもらうことになる。しかし、相対論と関連する本を読んだ人の感想は「よくわからなかった」というものが多いのである。そういった中でこの本は「考え方さえ変えれば、理解もできるモノのはず」の部分を取り上げているためか、なぜそのようになるのかもかなり説明できている。ただ、光速不変の原理を説明するあたりの展開は、アインシュタインの直感による否定が印象に残りすぎて、光が止まることがありえないことを読者が納得できるかどうかやや疑問に思えた。その他の部分では、この本をじっくり読めば、相対論の考え方をかなりわかりやすく説明できているように思える。加えて各章最初のコミックスや、著者お得意のSFアニメと結び付けた話の展開も、全体としてこの本を取り付きやすくしている。相対論に関連した質問をしてきた方へもお奨めしやすい本と言えるだろう。

さて、この本に評価の星をつける段になって、少々考え込んでしまった。上記のように著者の目論見はかなり成功していると思われる。しかし、私には同じ著者によるSFと天文を結び付けた本と比べて『目からウロコ度』といったものが、やや弱いように感じてしまった。それは、筆者自身も書いているように、世の中に相対論に関する本がそれこそ山のように出版されていることによるむずかしさもあるのだろう。結局、考えあぐねたあげく、5つ星の一步手前とした。5つ星は、著者が出してくれるであろう、まだ見ぬもっとおもしろい相対論の本のために残しておきたい。

石田俊人（兵庫県立西はりま天文台）